

『摩訶止観』発大心とその形成

大野栄人

一 問題の所在

天台智顕は、『摩訶止観』卷第一上および下に、五略の第一として「発大心」を説き、また卷第五上に十乘觀法の第二として「起慈悲心」を説示する。発大心も起慈悲心とともに、真正の菩提心を発することをいう。仏道修行の出発点において、この真正の菩提心を発さなければ、いくら仏道修行をしたとしても、何らの意味もそこに介在しない。

智顕が五略の第一として発大心を説いたことには、実に重大な意義があるといわねばならないのである。

本論においては、『摩訶止観』卷第一上・下の発大心の十種菩提心までを問題の対象とし、菩提心の発相およびそ

の諸相について究明することにしたい。あわせて、『摩訶止観』の発大心がいかなる過程を経て形成されたのか、形成課程とその思想を論究することにしたい。

ために、『摩訶止観』所説をもとにして、諸經論中にその根拠を尋ね、天台三大部以前の智顕の講説した著作に説かれる菩提心の諸相をも究明していくことにする。

二 三大部以前の発菩提心

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

智顕は三大部講説以前には、発菩提心について多くを語らない。いま、『方等三昧行法』『次第禪門』『法界次第初門』『六妙法門』『覺意三昧』『天台小止観』などにおいて、発菩提心がどのように捉えられているかを明らかにしたい。

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

まず、『六妙法門』の第九の円觀六妙門には、『華嚴經』を引いて、

華嚴經に云く、「初發心の時、便ち正覺を成し、諸法の真実の性に了達す。所有の慧身は他に由つて悟ら⁽¹⁾ず」と。と述べ、仏は初發心の時、すでに正覺を得られ、諸法の真実性を知見されたといふ。これは他者の化導によつて悟られたものではないことを明らかにする。また、『天台小止觀』の証果第十にも、初發心の菩薩が止觀を修することによつて、果を証するとして、諸經を引き、

若し真・応の二身を具足すれば、則ちこれ初發心住の菩薩なり。故に華嚴經に云く、「初發心の時、便ち正覺を成し、諸法の真実の性に了達す。所有の慧身は他に由つて悟らず」と。亦た云く、「初發心の菩薩は、如來の一身を得て、無量の身を作る」と。亦た云く、「初發心の菩薩は、八相を具足して成道す」と。亦た云く、「初發心の菩薩は、即ちこれ仏なり」と。涅槃經に亦た云く、「發心・畢竟の二は別ならず。是の如き二心は、先心こそ難なり」と。大品經に亦た云く、「須菩提よ、菩薩摩訶薩ありて、初發心より即ち道場に坐して法輪を轉ず」と。

当に知るべし。この菩薩は、仏の如しとなす。法華經の中には、龍女が珠を献ずることをもつて証となす。是の如き等の經は、みな初心に一切の仏法を具足することを明かすなり。⁽²⁾

と、『華嚴經』『大般涅槃經』『大品般若經』『法華經』などの文を經証として、菩薩が初發心時において、正覺を成じたことを説示している。『覺意三昧』弁法相には、發心の実相の顯現について、

能く無明の暗を破り、發心の実相を顯わすこと、日の滅して暗しといえども、虛空の相を顯わすが如し。しかも空に損益なし。慧日また是の如し。能く無明の暗を除き、發心の実相を顯わすなり。しかして心性は空にして不増不減なり。日の空を損せざるが如く、亦たまた空を益せず。能く空中の暗を除いて、空界の万象を顯わす。慧日もまた是の如し。⁽³⁾

とあり、發心の実相は、無明の暗を破ることによつて、はじめて顯現することを明かす。とくに、「發心の実相」と捉えていることに注目したい。まさしく『摩訶止觀』の發大心を明かすについて、四種四諦のそれぞれの立場から發

菩提心を説示するのは、単に菩提心を分別するのではなく、実相そのものを明らかにすることにあつたと考えられる。その先駆的思想を、この『覚意三昧』にみることができる。『方等三昧行法』には、

若し種の時に普ねく願う、一切衆生が食せば、皆な菩提心を発す。後人が食せば、大いに功德を得ることを。また次に、若し能く教化して、一千人の發菩提心を得るに、一切の罪、皆な悉とく消滅す。⁽⁴⁾

と説き、菩提心を發すことによつて、一切の罪業がすべて

消滅するといい、菩提心には種々の功德があるという。

『次第禪門』卷第一上に、菩薩の行人禪波羅蜜を修する大意を明かすところに、

第一に云何んが菩薩の發心の相と名づく。いわゆる發菩提心なり。菩提心とは、即ちこれ菩薩は中道正觀をもつて、諸法実相をもつて、一切を憐愍し、大悲心を起こし、四弘誓願を發す⁽⁵⁾。

と述べ、菩薩の立場より、發菩提心ということは、中道正觀・諸法実相をもつて、苦海に生きる一切衆生を憐愍することであるという。空の觀点から菩提心が捉えられている。

それは同時に、大悲心や四弘誓願を發すことであるとして、未度者令度・未解者令解・未安者令安・未得涅槃者令得涅槃の四弘誓願について詳説している。『法界次第初門』卷下之上の四弘誓願を明かす中にも、

菩薩もし諸法実相の慧をもつて、この四願を發さば、即ちこれ發菩提心にして、万行の本・靈覺の源なり。これをもつて一切の大士は、この弘誓によつて曩劫に因を修し、十方の大聖は、この四願によつて常に生死に処して広く衆生を度し、しかも永く滅せず⁽⁶⁾。

と説き、菩提心を發すということは、四弘誓願を發すことと同じである。發菩提心こそが、万行の根本であり、靈覺を得るための根源であるという。

三大部講説以前においては、發菩提心について詳説していない。仏は初發心時において、諸法の眞實性に了達して正覺を得られたという。發心の実相の顯現について、無明の暗を破ることを条件としている。發菩提心によって、一切の罪業が消滅するといい、種々の功德があるという。また、發菩提心は中道正觀・諸法実相の眼をもつて娑婆世界をみるに、生死苦海の中に生きる一切衆生を憐愍して、大

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

悲心や四弘誓願を発すことであるという。仏道に生きようとするものにとって、発菩提心は、万行の根本であり、靈覚を得るための根源となることを教示するのである。三大部講説以前において、発菩提心は仏菩薩の側から説示されている。しかも空の立場を基調としている。とくに、発菩提心と四弘誓願の関係が強調されている。『摩訶止觀』などに説かれる四種四諦においては、一切捉えられていない。

三 『摩訶止觀』所説の発大心

さて、『摩訶止觀』卷第一上の五略の第一の発心を説くについて、第一に方言、第二に非心、第三には心の三種に分けて論じている。

発心の訳語 まず第一は発心の方言つまり訳語についてである。仏教諸經典には、発阿耨多羅三藐三菩提心・発菩提心・発無上心・発無上道心・発真正菩提心・発大菩提心・発道心・発大菩提意・発道意などの訳語がある。『摩訶止觀』によれば、菩提とはサンスクリット語の *bodhi* を音写したもので、中国においては道と訳される。質多はサンスクリット語の *citta* を音写したもので、中国では心と

訳される。具体的には慮知の心である。また心のことをインドでは、汚栗駄 (*hrdaya*)ともいい、中国では草木の心のことをいう。矣栗駄 (*hrdaya*)ともいい、中国ではあらゆるもののが集まって形づくられる重要なものを心といつてはいる、という。⁽⁷⁾ 何れにしても、発菩提心は、仏道に入るための絶対条件として、仏道を求める念を発し、智慧の完成をめざす志を起こし、一切衆生を救済する誓願をもつことをいうのである。

十種非心 『摩訶止觀』には、第二として十種の非心（濁心）を明示する。いわば菩提心を発す心を阻害するものである。その十種非心を列挙することにしよう。(1) 上品の十惡として、貪・瞋・癡の三毒に執着すれば、地獄の心を發して、火途の道を行ずる。(2) 中品の十惡として、眷属の多いことを望めば、畜生の心を發して、血途の道を行ずる。

(3) 下品の十惡として、四遠八方に聞こえ称揚欽詠されるとを望めば、鬼心を發して、刀途の道を行ずる。(4) 下品の善心として、他を軽んじて己を尊とび、外面だけに仁義礼智信を揚げれば、阿修羅の道を行ずる。(5) 中品の善心として、世間的な樂を欣い、癡・慢の心を満足させれば、人間

の道を行ずる。(6)上品の善心として、天上はただ樂だけの世界であると知り、天上の樂のみを得るために六根を閉じこめ、六境が入らないようにすれば、天上の道を行ずる。(7)欲界の主心として、身・口・意の三業の働きがわずかでもあれば、一切を自分の思い通りにしようとするのは、魔羅道を行ずる。(8)世智心として、鋭どい智慧をもち、聰明であつて、勝れた才知があり、道理に明ないと、すべての人々から仰がれたいと願うのは、尼犍（外道）の道を行ずる。(9)梵心として、五塵や五欲などの対象に迷う心は少なくなり、第三禪は岩から湧き出る泉のように、内から湧きのぼる。これは欲望を断するための心の働きで、色界・無色界の道を行ずる。(10)無漏の心として、凡夫は煩惱を克服した状態を善だと思い、執われたり溺れたりする。賢聖は、善惡に陥ることを徹底的に呵責する。淨慧・淨禪・淨戒を尊んで、ひたすら惡を破すのは、二乘の道を行ふことになる、⁽⁸⁾といふ。

これら十種の非心は、菩提心を発す心を破すものであつて、仏道においては、徹底的に否定しさらねばならない心である。この十種非心は、すでに『次第禪門』卷第一上に、

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

十種の行人あつて、発心修禪同じからず。多く邪僻に堕在して、禪波羅蜜の法門に入らず。何等をか十となすや。一には利養の故に発心修禪すれば、多く地獄の心を発すに属す。二には邪偽の心より生じて、名聞称歎のための故に発心修禪するは、多く鬼神の心を発すに属す。三には眷属のための故に発心修禪するは、多く畜生の心を発すに属す。四には嫉妬して他に勝るとなすが故に発心修禪するは、多く修羅の心を発すに属す。五には惡道の苦報を畏れて、諸の不善業を息むがための故に発心修禪するは、多く人の心を発すに属す。六には善心安樂のための故に発心修禪するは、多く六欲天の心を発すに属す。七には勢力自在を得んがための故に発心修禪するは、多く魔羅の心を発すに属す。八には利智捷疾を得んがための故に発心修禪するは、多く外道の心を発すに属す。九には梵天處に生ぜんがための故に禪を修するは、これ色・無色界を発すに属す。十には老・病・死苦を度して、疾かに涅槃を得んがための故に発心修禪すれば、これ二乗の心を発すに属す。この十種行人について、善惡殊なりといえども、縛脱異りあり。既に並びに大悲正觀なく、

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

発心邪僻なれば、皆な二邊に墮して中道に趣かず。もし
この心に住して禪定を修行すれば、終に禪波羅蜜法門と
相應することを得ず。⁽⁹⁾

とある。『摩訶止觀』の十種非心は、この『次第禪門』の
所説をそのまま依用し繼承して、それに『大智度論』卷第
八十六の上・中・下品を充當させる。すなわち、
十不善道に上・中・下あり。上は地獄、中は畜生、下は
餓鬼なり。十善道もまた上・中・下あり。上は天、中は
人、下は鬼神なり。十善道に住して、能く欲（界）を離
れて色界に生ず。色（界）を離れて無色界に生ず。三惡
道中、常に苦を受くるが故に、応に知るべし、応に遮る
べしという。⁽¹⁰⁾

と説いている。十不善道および十善道にそれぞれ上・中・

下品を分け、さらに欲界・色界・無色界の別を説示してい
る。これらを十種非心に当ててている。

『大般涅槃經』卷第二十六には、菩提心の壞と退について
て説いている。六法が菩提心を破壊するとして、

何等かを六となす。一には吝法。二には諸の衆生におい
て不善心を起す。三には悪友に親近す。四には精進を

勤めず。五には自から大いに憍慢なり。六には世業を営
務す。是の如き六法は、則ち能く菩提の心を壞す。⁽¹¹⁾

と、これらの六法が菩提心を壞すものであるという。一の
「吝法」とは、恨み惜しむ心のことである。また、同經に
は、五法および二法が菩提心を退ぞかせるとして、

何等をか五となす。一には外道に在りて出家せんことを
樂う。二には大慈の心を修せず。三には好んで法師の過
罪を求む。四には常に生死に処在することを樂う。五に
は十二部經を受持・読誦・書写・解説することを喜ばず。
これを五法が菩提心を退すと名づく。……また二法の菩
提心を退するあり。何等をか二となす。一には五欲を貪
樂す。二には三寶を恭敬し尊重すること能わず。是の如
き等の衆因縁をもつての故に菩提心を退するなり。⁽¹²⁾

とあり、これらの五法や二法が菩提心を発すための障害で
あるという。『大般涅槃經』の所説は、『摩訶止觀』の所説
と相應しているわけではないが、何れも人をして菩提心を
生起させることのない要因となるものであるという。

『摩訶止觀』には、この十種非心を有為・無為、有漏・
無漏、善・惡、染・淨、縛・脱、真・俗などの觀点からみ

て、前九法が苦・集に、後一法が道・滅に当たるといい、つづいて、

一切の根・塵・三業・四儀に歴て、心を生じ念を動かすに、皆なく観察して、濁心をして起ることを得しむることなかれ。たとえ起るとも速かに滅せよ。明眼ある人はよく險惡の道を避くるが如く、世に総明の人ありてよく衆惡を遠離す。初心の行者、もしこの意をみれば、世間のためにしかも依止となるに堪えたり、云々。⁽¹³⁾

と述べ、この十種非心は、苦・集・滅・道の現実であると観察して、まず己心を衆惡から遠離させる生き方がなされなければならない。また少しでも世の人々の支えとなるよう努力がなされなくてはならない。邪心のままで、いくら仏道を求めたとしても、それは仏道とはいえない。十種の邪心の徹底した否定がなされない限り、仏道を求める資格はないといわねばならないのである。

感應道交の発心 しかし、邪心の徹底した否定といつても、菩提心を發して、仏道を求めるということは、個に関わる問題である。『摩訶止觀』には、つづいて、「行者が自から發心するのか。それとも他者が教えて發心するのか」

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

という問い合わせに對しては、智顥は、「自發的でも、他者によるのでも、兩者が共に働いて發すものでも、兩者の離反によつて發るものでもない」と、何れの場合も否定して、⁽¹⁴⁾感應道交して、發心を論ずるのみ。

とあり、發菩提心は感應道交によることを明示する。

智顥は感應について、すでに『法華玄義』卷第六上に、述門十妙の第六として、感應妙を説いている。『法華玄義』には、感と応を分別する。まず、感とは、機とか縁と同義であるとして、感の代りに機の語を用いている。機に三義ありとして、微義・閑義・宣義をあげている。(1)微義とは、元来、衆生には善を生ずる可能性をもつてゐる。仏菩薩がこれに應同すれば、現實に善を生ずることになり、應同しなければ善は生じないので微という。(2)閑義とは、衆生には善・惡があつて、この善・惡は仏の慈悲と相關関係にある。(3)宣義とは、無明の苦を抜く場合に、仏菩薩の悲が法性の樂を与えようとすれば、仏菩薩の悲がふさわしいという。

応にも三義ありとして、赴義・対義・應義をあげている。(1)赴義とは、衆生の機縁が動こうとするに、聖人が應同す

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

れば善を生ずることになる。(2)対義とは、人が主客相互に関わることをいう。売る人（如來）がいても、それを買う人（衆生）がいなければ、売買は成立しないという。(3)応義とは、仏菩薩の悲は苦を救い、慈は樂を与える。慈悲の法をもつてするならば、善を願い悪を厭うように、仏菩薩は適材適所に応ずるというものである。⁽¹⁵⁾

さらに『法華玄義』には、この機と応を、『大智度論』卷第一所説の四悉檀⁽¹⁶⁾に配して、微をもつて機を釈し、赴をもつて応を釈するならば、⁽¹⁷⁾樂欲の心におもむく。衆生に善を生じさせるために、仏菩薩は樂欲の心に赴くので、これを世界悉檀に配する。もし閑をもつて機を釈し、対をもつて応を釈するならば対當している。仏菩薩の悲が苦機に対し、慈が善機に対するので、対治悉檀に随つて機応を明かす。宜をもつて機を釈し、応をもつて応を釈せば、為人悉檀・第一義悉檀となる。事善を生ずるにふさわしい応じ方をするので為人悉檀となり、理善を生ずるにふさわしい応じ方をするので第一義悉檀に相当するという。つづいて、機と応を冥機冥応・冥機顯応・顯機顯応・顯機冥応の四句に分別し、機と応との感應道交を論じている。また、善機

惡應・惡機善應・偏機円應・円機偏應の四種の立場より、感應の種々の可能性について詳説している。感應道交とは、衆生が仏道を求める志を起こすその瞬時において、仏菩薩がそれに應同するということである。智顕の説く發菩提心は、あくまでも機と応が合融したそのときにはじめて成立するものであるというのである。

『摩訶止觀』には、『禪經』所説の四隨（隨樂・隨宣・隨治・隨義⁽¹⁹⁾）、『大智度論』所説の四悉檀・五（因）縁ともに感應の意を明かすとして、

然るに四隨・四悉（檀）、五（因）縁は、名は異なれども意義は則ち同じ。今これを説くに、四隨はこれ大悲の応益、（四）悉檀はこれ憐愍の偏施なり。けだし左右の異なるのみ。（五）因縁といふは、或いは聖を因とし、凡を縁とし、或いは凡を因とし、聖を縁とす。則ち感應道交なり。⁽²⁰⁾

と述べている。これらの何れもが、仏菩薩と衆生の感應を明らかにしたものであり、菩提心はこの地平において發るものであることを説示する。さらに、

或いは四悉檀は五縁を成じ、五縁は四悉を成す。或いは

四悉は一因縁を成じ、一因縁は一悉を成す。或いは一々の因縁にみな四悉を具し、四悉に五縁を具す。⁽²¹⁾

とあり、相互に關係しあうことによつて、菩提心が顯われるという。このように、感應道交によつてはじめて菩提心が発るのであり、これを觀といい、十種の邪僻の心が息むことを止といふのである。

つぎに『摩訶止観』卷第一上には、第三として、發菩提心の是相を明らかにする。四種四諦・四弘誓願・六即の立場から詳細に論じてゐる。本論においては、四種四諦までを論究し、別稿において以下を究明することをお断りしたい。

四種四諦説と發菩提心 『摩訶止観』卷第一上に、「いかんが大心を發すや。衆生は昏倒して自から覺知せず。勧めて醒悟し、上求下化せしむ」と述べるように、衆生は自からが誤った思考をしていることに気づいていない。そのため衆生を醒悟させ、上求菩提・下化衆生の心を發させるという。

智顥は昏倒した在り方から脱却させるために、衆生の現実である苦・集・道・滅の四諦をたて、それを『大般涅槃

經』聖行品所説の生滅四諦（藏教）・無生四諦（通教）・無量四諦（別教）・無作四諦（圓教）の四種四諦に当てはめ、それぞれの立場から發菩提心について論じてゐる。智顥の『四念處』『大本四教義』『維摩經玄疏』『法華玄義』などに説かれる四種四諦説と、『摩訶止観』の所説を比較しながら考察していくことにしたい。

生滅四諦と發心 まず第一の生滅四諦（藏教）の立場から、真正の菩提心を發すについて、『大本四教義』卷第七には、藏教における菩薩の位を弁ずとして、その第一に發菩提心をおき、

釈迦牟尼菩薩の如きは、過去世において陶師たり。釈迦牟尼仏に値いて、彼の仏を供養せり。……爾の時、陶師、仏を供養し已る。すなわち菩提心を發し、この誓願を作す。願くは未來世に我れ作仏することを得ん。還た釈迦牟尼と号す。智慧の弟子を舍利弗と名づけ、神足の弟子を目犍連と名づけ、多聞の侍者を阿難と名づけ、その願を悦ばしむべし。これより初め菩提心を發す。即ち慈悲・四弘誓願を發すなり。但だ三藏教の慈悲・四弘誓願は皆な生滅の四諦より起くる。言うところの慈悲心とは、

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

一に大慈心は愛・見の二種にして、衆生に道・滅の樂を与えると欲す。二に大悲心は愛・見の二種にして、衆生の苦・集の苦を拔かんと欲するなり。⁽²²⁾

と説き、生滅の四諦すなわち藏教の立場より發菩提心を論ずる。釈迦牟尼菩薩は、過去世において陶師であったが、菩提心を發して作仏を願い、釈迦牟尼と号した。仏弟子たちのために、慈悲・四弘誓願を發したという。慈悲それぞれを愛・見の二種とし、苦・集の苦をぬくといふ。『四念処』卷第一には、

二に真正の發心とは、無常の火が諸の世間を焼くことを驚覺し、一心に出ることを求めて刹那も懈らず。名利を念すること莫かれ。譽の園に在るが如く、跳透して脱を求むるも、犢の母を失いて惆悵みて鳴呼に似たり。禪慧を修習して頭然を救うが如し。云々。⁽²³⁾

とあり、無常の火が一切の世間を焼き尽くすことを恐れ、一心に出離することを願つて真正の菩提心を發すといふ。『大本四教義』卷第四に、十法を明かし三蔵の四門を成すとして、

二に真正の發心をもつて、見・有を成じ道を得るは、無

明の因縁を知るに、三界に一切生死の苦あり。心、生ずるを覺悟して無明を断じ、結業して正しく涅槃を求めると欲せば、この心は真正にして、一切の天魔外道の心を過ぐるなり。⁽²⁴⁾

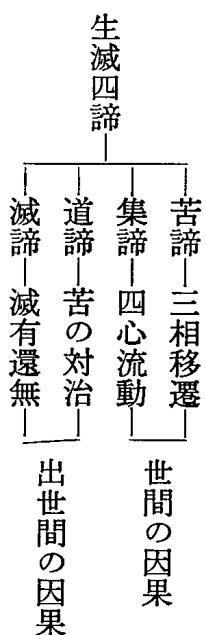
と述べ、三界に生死の苦があり、無明を断じつくし、諸業をつくりず、涅槃を求める心を發すことを真正の發菩提心であるといふ。『法華玄義』卷第二下には、生滅の四諦について、

言う所の生滅とは、真に迷うこと重きが故に、事に従つて名を受く。然るに苦・集はこれ一法なれども、因果を分ちて兩つとなす。道・滅も亦た然り。雜心の偈に云く、「諸行の果性はこれを苦諦と説き、因の性を集諦と説き、一切有漏の法の究竟して滅するを滅諦と説き、一切の無漏の行を道諦と説く」と。大經に云く、「陰入重担逼迫し繫縛するはこれ苦諦なり。見・愛の煩惱の能く來果を招くはこれ集諦なり。戒・定・慧・無常・苦・空の能く苦の本を除くはこれ道諦なり。二十五有の子、果の縛を断ずるはこれ滅諦なり」と。……大經に云く、「凡夫は苦ありて諦なく、声聞・緣覚は苦ありて苦諦あり」と。

当に知るべし。凡夫は聖理を見ず、智を得ず、説くことあたわざれば、但だ苦にして諦なし。声聞は三義を具す。⁽²⁵⁾とあり、諸經を引証して生滅四諦について説く。苦諦は生死海に沈没している凡夫に対し、この現実が苦海であることを自覚させる。生きては死し、死しては生きるという生死の苦に束縛されていることをいう。苦界に生滅する因となるのが、見・思の二惑であることを明らかにするのが集諦である。二十五有の子縛果縛を断じつくして、集も汚めえず、苦も惱まさず、道も通じない、滅も淨められない法性真理に到達するため、戒・定・慧、七科三十七道品を修するという。

『摩訶止觀』には、これらの諸説を総括して、より簡潔に説示する。生滅の四諦というのは、苦・集諦が世間の因果であり、道・滅諦が出世間の因果である。苦は生じたり、所在したり、また滅するように、常に三相が移り遷れる。集諦は貪・瞋・慢・癡の四心が流動しつづける。道諦は苦の対治を行なう。滅諦は有を滅して無に還ることをいう。生滅の四諦は、世間・出世間に関わらず、変異することを前提としているのである。生滅の四諦はいわば藏教所説の

法門であり、觀法でいえば析空觀に相当し、四諦の因果に因縁生滅を認める所説である。図示すればつぎのごとくである。



『無生四諦と発心』 第一は無生四諦（通教）の立場から、真正の菩提心を發すことを説く。『大本四教義』卷第八には、無生の四諦において、その心を降伏し、四弘誓願を起こそ。衆生は虚空の如しと知るといえども、しかも発心して一切衆生を度す。この菩薩は衆生を度せんと欲すること、虚空を度すが如し。⁽²⁷⁾

と述べ、一切は虚空のごときであつて、衆生もまた虚空のごときものであると知つて、菩提心を發すといふ。『維摩經玄疏』卷第二には、通教の真正の発心として、

真正の発心とは、三乗の行人、正しく因縁所生を知りて、三界の火宅を明かす。生死を覺悟して、涅槃を志求す。⁽²⁸⁾ 但だ菩薩の大悲済は物心に異なる。

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

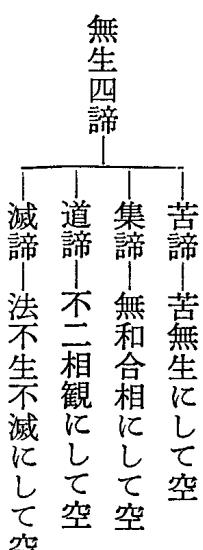
と説かれ、三乗の行人は、因縁所生法の理を覺知して、三界の火宅を出て、涅槃を志求することを真正の菩提心といふ。『法華玄義』卷第二下には、無生の四諦について、

無生とは真に迷うこと軽きが故に理に従つて名を得。苦は逼迫の相なく、集は和合の相なく、道は二相ならず、滅は生相なし。また苦空に習い應ず。三も亦た是の如し。また無生とは、生を集・道に名づく。集・道すなわち空なり。空の故に集・道を生ぜず。集・道生ぜざれば、すなわち苦・滅なし。事に即してしかも真なり。滅してのち真に非ず。大経に云く、「諸の菩薩等は、苦に苦無しと解す」と。この故に苦無くしてしかも真諦あり。三もまた是の如し⁽²⁹⁾。

とあり、無生の四諦は一切空の理法に基づいて説かれる。

苦の無生を知るのが苦諦、集の無和合相を知るのが集諦、不二相をもつて觀するのが道諦、法の本より不生にして滅のないことが滅諦であるといふ。すなわち声聞・縁覚・菩薩いずれも空理を觀じ、見・思の二惑を断じ、共に三界の分断生死を超えるのが無生の四諦であり、通教の立場である。

『摩訶止観』の所説は、『法華玄義』と大体同趣旨である。すなわち、無生の四諦は一切が空であるので、苦はさせまるとはなく、苦として捉えられるものは何もない。五蘊もまた空である。集もまた空であつて、和合の相はない。なぜならば、因・果ともに空であるので、因の空と果の空が合するということはないからである。食・瞋・癡の三毒もまた空である。道もまた空であるので、対治することも、対治されるものもあるわけではない。滅も空であり、滅するものなど何もないといふのである。⁽³⁰⁾これが無生の四諦であり、通教の教えである。この通教の觀法は巧度の体法觀であり、因縁諸法は空にして無生であり、四諦の因果は生滅しないという所説である。いま図示すればつきのごとくである。



無量四諦と発心 第三は無量四諦（別教）の立場から、真正菩提心を發すことを説く。『四念處』卷第三の別教の十

法を明かすところに、

二に真正の発心は、正しく無量の四諦の心なり。常住の仏果を求むるに能く法界の衆生を度す。通家はただ発心して、無生の四真を縁す。有余涅槃を得、界内の衆生を度せしむ。⁽³¹⁾

と、真正の発心は無量の四諦であつて、法界の衆生によく仏果を与えるといふ。『大本四教義』卷第九には、無量の四諦の立場より、菩提心を慈悲に充当させて、

若し信心を開発せば、即ちこれ菩提心を発す。菩薩道を行じ、菩提心を発さんと欲せば、即ちこれ慈悲をもつて一切衆生を憐愍するが故に、無量の四諦をもつて、慈んで衆生に無量の道・滅の樂を与え、悲んで衆生の無量の苦・集の苦を救う。無量の四弘誓願を起こし、未だ無量の苦諦を度せざるを度せしむ。未だ無量の集諦を解せざるを解せしむ。未だ無量の道諦を安ぜざるを安ぜしむ。未だ無量の滅諦を得ざるを大涅槃の常樂我淨を得しむ。これは別教菩薩のための信解により、初め菩提心を発すなり。⁽³²⁾

と説く。信心の開発によつて菩提心が発るといふ、菩提心

を發す絶対条件として、慈悲心をもつて一切衆生を憐愍しなければならないといふ。また四弘誓願を起こして、衆生の無量の苦・集・道・滅を度脱して、大涅槃の常・樂・我・淨を得させるといふものである。『法華玄義』卷第二下には、無量の四諦について、

無量とは、中に迷うこと重きが故に事に従つて名を得。苦に無量の相あるは、十法界の果不同なるが故なり。集に無量の相あるは、五住の煩惱不同なるが故なり。道に無量の相あるは、恒沙の仏法不同なるが故なり。滅に無量の相あるは、諸の波羅蜜不同なるが故なり。大經に云く、「諸陰は苦なりと知るを名づけて中智となす。諸陰を分別するに無量の相あり。諸の声聞・縁覚の所知に非ず。我れ彼の経に於てこれを説かず」と。

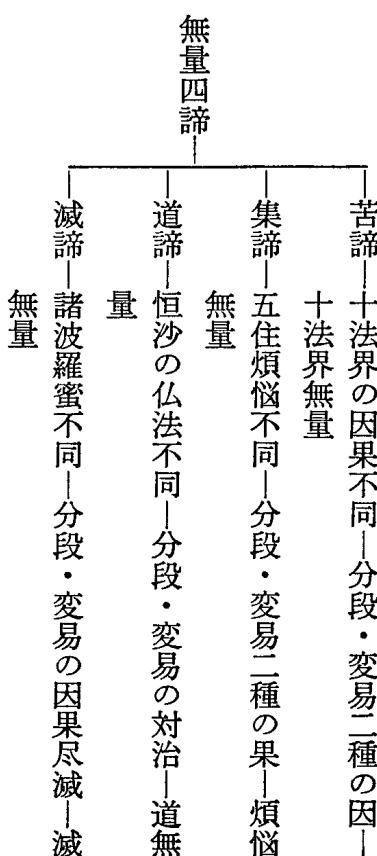
とある。無量の四諦は界外の変易生死から出離を求める菩薩のために説かれたものである。苦・集は分段と変易の二種の因果を包含する。苦といえば、分段・変易の二種の因果を意味する。滅といえば、分段・変易の因果を尽滅する。道といえば、分段・変易の全体の対治を意味し、四諦の法の内容に際限がない。無量の四諦は、「中に迷う」といわ

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

れるように、中道がいまだ隔壁不融の但中である。いわば別教の法門に当たる。

『摩訶止觀』には、無量の四諦について、まず苦についていえば、それは一なるものでも二なるものでもない。無量の相がある。人間の生きる世界は十法界にわたつており、それぞれの界に種々無限の苦がある。地獄に無限の地獄界があり、それ以外の法界も五蘊の集合によつてできつていて、無量の相がある。集にも無量の相がある。貪・瞋・癡の三毒や、身・口・意の三業によつて生ずる煩惱も無量である。道にも無量の方法がある。析法觀・体法觀もあれば、拙い方法もあり、巧みな方法もある。方便もあり、まわり道をして悟入させたり、直接的に悟りへ導びく方法もある。道程にも長・短があり、説き方にも方便と真実の方法があつて無量である。滅にも無量の相がある。見・思の二惑を滅する見方もあるが、空を即座に体得する見解もある。また貪・瞋・慢・癡を析滅し、体滅させるという見方もあり、塵沙の惑を滅したり、無明を滅するという見解もある。悉檀のそれに即して滅を考えても、別々無量の見解があり、無量の四諦というわけである。⁽³⁴⁾ 説相としては、

『法華玄義』の所説を、『摩訶止觀』において詳説している。無量の四諦は、別教の立場であり、十法界に無量の差別があり、四諦にも無量の相があるという所説である。いま図示すれば、つぎのごとくである。



さらに『四念處』卷第三には、四種四諦は何れも無量であるとして、

分別校計するに、生滅・無生滅・無量・無作の苦・集・滅・道は皆な無量なり。如來藏を覆い、藏は闇なるが故に二十五有の業を作成す。諸の生死を受け、この長夜を愍れんと菩提心を發す。四弘誓を与え、無量の繫縛を脱するによつて、亦た衆生は無量の繫縛を脱す。これを断惑の別と名づく。行位の因果等の別を知るべきなり。問

う、「無作既に勝る。何ぞ無作を縁して菩提心を発さざるや」と。答う、「別家は無作はこれ果、果は因に通ぜざるをもつての故に発心の正意に非ず。意とは、無量を縁して果に至りて、方に無作を成するのみ」と。問う、「若し爾らば初地にすでに無作を得。何の意ぞ、縁せずして発心するや」と。答う、「初地は妙覚を分得する時乃ち究竟す。例せば、三藏の初めは生滅にして、果は方に無生の如し。通（教）は則ち爾らず。発心より即ち無生を観ず。別人は初めは無量を縁して後に乃ち無作なり。⁽³⁵⁾ 円人は発心の初めより則ち無作なり。⁽³⁶⁾

と述べ、生滅・無生滅・無量・無作の四諦は、すべて無量に属すという。衆生が生死流转するのを愍れんて菩提心を發す。四弘誓願を起こすことによつて、無量の繫縛から脱する。さらに、生滅・無生・無量・無作の四諦を藏・通・別・円に充当させ、問題点を指摘する。どうして無作を縁して菩提心を発さないのか、という問い合わせに對して、あくまでも無量を縁して果に至つて無作を成するという。また、円人は発心の初めより無作であるから、すでに初地において無作を得てゐるという。

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

無作四諦と発心 第四是無作の四諦（円教）の立場から、真正の菩提心を発することを説く。『四念處』卷第四には、二に真正の発心は、下を度し上を崇む。転た慧の真正を成す。故に經に云く、「百生・千生・千万億生に心を正念せしめ、正念を以ての故に如來善く護念す」と。また七覺の中心の如く、沈むも念を以てこれを起こし、生死を破して即ち涅槃を得しむ。若し心の散する時、念覚を以てこれを攝し、煩惱即菩提ならしむ。これを真正の発念心となすなり。⁽³⁶⁾

と説き、円教の菩提心は、正念や念覚によつて、衆生をして煩惱即菩提にいたらしめるという。『大本四教義』卷第十一の円教の行位を明かすなかに、
一に聞法に因つて信を生ぜしむることを明かさば、上根の利智は、円教を聞いて、因縁即中道を詮らむ。無作四諦の理は、即便ち一実諦を信解するなり。即ちこれ如來來・虛空・仏性は、世間に非ず出世間に非ず、因に非ず果に非ず、宣説すべからず顯示すべからず。無説にして而も世間の因果を説けば、即ちこれ無作の苦・集なり。出世間の因果を説けば、即ちこれ無作の道・滅なり。

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

故にこの経の大士訶弥勒の云く、「仏は一切衆生の畢竟寂滅なるを知る」と。即ち涅槃の相また滅すべからず。一切衆生は即ち菩提の相なり。若し涅槃即生死を知れば、これ無作の苦諦となし、若し菩提即煩惱を知れば、これ無作の集諦となし、若し生死即涅槃を知れば、これ無作の滅諦となし、若し煩惱即菩提を知れば、これ無作の道諦となすなり。ただ生死に非ず、涅槃に非ず、菩提に非ず、煩惱に非ざるを以て、これ一実諦となすなり。⁽³⁷⁾

と、無作の四諦は、一実諦を信解することであるといふ。一実諦とは円融相即のことをいう。涅槃即生死は無作の苦諦、菩提即煩惱は無作の集諦、生死即涅槃は無作の滅諦、煩惱即菩提は無作の道諦であるとする。つまり四諦そのままが実相を顕現して、絶対相即していく、是非を絶するのである。『法華玄義』卷第一下には、

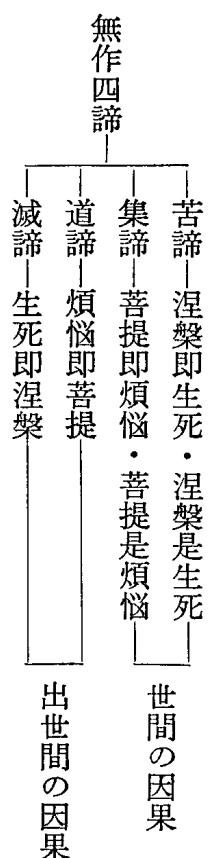
無作とは、中に迷うこと軽きが故に理に迷つて名を得。理に迷うを以ての故に、菩提これ煩惱なるを名づけて集諦となし、涅槃これ生死なるを苦諦と名づく。能く解するを以ての故に、煩惱即菩提なるを道諦と名づけ、生死即涅槃なるを滅諦と名づく。事に即してしかも中なれば、

思なく、念なく、誰か造作するなし。故に無作と名づく。大經に云く、「世諦即ちこれ第一義諦なり。善方便ありて、衆生に隨順して二諦ありと説くも、出世の人知れば、即ち第一義諦なり」と。一実諦とは、虚妄なく顛倒なく、常樂我淨等なり。⁽³⁸⁾

と説き、苦・集・道・滅は、その当処において一体相即するという。苦諦である三界・六道はもともと菩提に迷うので現前しているにすぎない。その本体は清浄なる仏智であるという。滅諦である涅槃も新たに得べきものでなく、現実の惑・業・苦の三道であるという。道諦は煩惱即菩提と説く。このように、生死と涅槃が絶対相即している立場から四諦が説かれるので無作の四諦という。

『摩訶止観』には、無作の四諦について、一切法をつきつめてみるとならば、実相でないものはない。まさに不可思議としかいいようがないのである。苦・集諦も本来断じられねばならないものでなく、道諦を修して、苦の原因を断つものではなく、苦の原因が滅されなければならぬものではない。一切法そのままを実相とみるのが、無作の四諦ではない。⁽³⁹⁾ 一切法そのままを実相とみるのが、無作の四諦の立場である。これは円教の法門に當り、教相においては

円融、觀心においては円頓を説くのである。無作の四諦を図示すれば、つきのごとくである。



以上が、『四念處』『大本四教義』『維摩經玄疏』『法華玄義』および『摩訶止觀』に説かれる四種四諦説である。発菩提心をそれぞれ四種四諦に充当させて論じている。智顥の高揚する発菩提心は、無作の四諦すなわち円教によることを明示するのである。それは、『大本四教義』『法華玄義』『摩訶止觀』において、より明確に示されているのである。

四諦と四土・十二因縁・因縁觀・三諦偈 ⁽⁴⁰⁾ さらに、『摩訶止觀』卷第一上には、四諦を四土に配している。同居土土は生滅に当り、凡夫と聖者が同居する世界である。方便土は無生滅に当り、一切が空であることを了解し、見・思の二惑を断じたものの生まれる世界である。実報土は無量に当たり、中道の理によって、無明を対治したものの世界である。寂光土は無作に当り、真実絶対の世界であるという。

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

つぎに、四諦と十二因縁の関係⁽⁴¹⁾について説く。苦諦は識・名色・六入・触・受・生・老死の七支である。集諦は無明・行・愛・取・有の五支である。道諦は因縁を対治するための方便である。滅諦は無明から老死の十二支の滅が悟りを導びくものであるという。

また、因縁を観する観じ方、すなわち智慧の相異によつても、四種の異なりがあるという。⁽⁴²⁾ 下智觀は声聞の菩提、中智觀は緣覺の菩提、上智觀は菩薩の菩提、上上智觀は仏の菩提をそれぞれ得るという。

さらに、『中論』卷第四の觀四諦品の第十八偈を四諦に配する。「因縁所生法」という句は生滅の四諦、「我說即是空」という句は無生滅の四諦、「亦名為假名」という句は無量の四諦、「亦名中道義」という句は無作の四諦に当るといふ。

十種發菩提心 さて『摩訶止觀』卷第一上には、諸經論中には種々の契機を縁として、菩提心が発することを説示している。それを智顥は十種の發相に総括する。

- (一)種々の理を推して菩提心を発す。
- (二)種々の相をみて菩提心を発す。

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

- (三)種々の神通をみて菩提心を発す。
(四)種々の法を聞いて菩提心を発す。
(五)種々の土に遊んで菩提心を発す。
(六)種々の衆をみて菩提心を発す。
(七)種々の行を修するをみて菩提心を発す。
(八)種々の法の滅するをみて菩提心を発す。
(九)種々の過をみて菩提心を発す。

(十)他の種々の苦を受けるのをみて菩提心を発す⁽⁴⁵⁾。

これらの十種の発菩提心は、『止觀輔行』に指摘するよ

うに、『華嚴經』卷第八の菩薩十住品第十一の偈文⁽⁴⁶⁾を根拠として説示している。いま『摩訶止觀』所説の十種発菩提心に相当する箇処を、『華嚴經』および諸經論より摘出す

(二)仏の種々の相をみて菩提心を発すについて、『華嚴經』卷第八には、

と、仏は三十二相・八十隨形好を具足している。なかなか遇い難いと了解して菩提心を発すという。『發菩提心論』卷上には、最勝果を求めて菩提心を発すに五事ありとして、一には諸の如來を見るに、相好莊嚴に光明清徹にして、遇う者は惱を除く。修集のための故に。二には諸の如來を見るに、法身常住にして染なし。修集のための故に。

能く是処と及び非処と、若くは我も非我とは是の如き等を知り、平等なる眞実の義を解らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

一切諸法は語言断え、自性あることなく虚空の如し。悉

とく真諦の義に明達せんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す⁽⁴⁷⁾。

と、相対を絶して平等真実義や真諦義を了解するために菩提心を発すという。『大智度論』卷第七十一には、

諸法の本来空なるを知りて、能く無上の道心を発す⁽⁴⁸⁾。

と、一切諸法の本来空であることを了解して菩提心を発すといふ。

法聚あり。修集のための故に。四には諸の如来を見るに、十力・四無畏・大悲・三念処あり。修集のための故に。

五には諸の如来を見るに、一切智あり。衆生を憐愍して、慈悲普ねく覆う。能く一切の正道に愚迷するもののため、修集をなすが故に。⁽⁵⁰⁾

と、諸の如来は、相好莊嚴であり光明清徹で、法身常住であり不染で、戒・定・慧を守り、解脱を知見して清浄法を聚めている。また、十力・四無畏・大悲・三念処を具備し、一切智をもつて、一切衆生の迷妄を救済するという。『大智度論』卷第二十六には、

人ありて仏の陰藏の相を見て、能く善根を集め、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。⁽⁵¹⁾

と、陰藏相は三十二相の一つで、陰部が内部に隠れていることである。

(三)種々の神通をみて菩提心を發すについて、『華嚴經』卷第八には多種を説いている。すなわち、無等々の大神変をみて、妙法及び教誡を説くを聞き、五道の無量なる苦を觀察して、無畏の大士は初め発心す。一毛より無量の光を放演して、普ねく十方一切の刹を照

す。一の光において一切を覺らしめんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

無量の仏刹の思議し難きを、皆な悉とく能く一掌の中に置き、一切幻化の如しと解らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

一切十方の大海上を、一毛を以て滴み尽して余すことなく、悉とく分別して滴数を知らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

無量無邊の諸の世界を、能く一毛を以て悉とく称り^(はか)挙げて、有無の真実相を知らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

金剛圍山の數無量なるを、尽とく能く一毛端に安置し、至大に小相あることを知らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

普ねく能く無量の身に應現して、一切世界の微塵と等しきを、悉とく幻化の如しと了達せんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。⁽⁵²⁾

と、種々様々な神変・神道をみると契機として菩提心の發相を説いている。『大智度論』にも、

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

衆生は菩薩の希有の事をみて皆な阿耨多羅三藐三菩提心を發す。⁽⁵³⁾

仏身を化作して、大光明を放つ。十方世界を照し、大地を震動させ、衆生をして發心して、善法を行ぜしむ。⁽⁵⁴⁾神通力・大威徳をみて發心する者あり。⁽⁵⁵⁾

と、種々の神変をみるとよつて菩提心を發すという。
（四）種々の法を聞いて菩提心を發すについて、『華嚴經』卷第八には、やはり多種をあげている。

道の無量なる苦を觀察して、無畏の大士は初め發心す。十方一切の諸の世界に、能く一音を以て徧ねく充滿し、悉とく淨妙の声を解了せんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

一切衆生の語言の法を、一言に演説し尽して余すことなく、悉とく淨密の音を解了せんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

如來の清淨なる微妙の音は、十方諸の世界に充满す。具足せる舌根の相を得んと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

一切十方の諸の仏刹、其の中の無量なる諸の如來の、悉とく仏の正法を了達せんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

具さに一句の法を演説せんと欲せんに、阿僧祇劫にも窮尽することなし。弁才をして断絶せざらしめんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

と、妙法や教誡・一音・一言・微妙の音・正法了達・一句の法を聞くことによつて、菩提心を發すことを明らかにしている。また、『護國經』にも、

爾の時世尊、衆のために説法す。衆心悦んで大道意を發す。時に彼の婆羅門・大長者等、法を聴受してすでに咸とく皆な忻悦して大道心を發す。⁽⁵⁶⁾

と、仏の説法を聞いて僧俗ともに菩提心を發したという。

『大般涅槃經』卷第二十四にも、

若し善友諸菩薩に遇いて、妙法を説くを聞かば、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。⁽⁵⁸⁾

と、善友や諸菩薩より妙法を聞いて菩提心を發したという。『大智度論』にも、

この布施によつて、その説法を聞いて、便ち阿耨多羅三

藐三菩提心を發す。⁽⁵⁹⁾

利根の心堅く未だ發心せず。前より久しく來りて諸の無

量の福德智慧を集む。この人、仏に遇うてこの大乗法を

聞いて阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。⁽⁶⁰⁾

發心に種々あり。説法を聞いて發心する者あり。

と、布施による説法や大乗法を聞いて菩提心を發したこと

を記している。

(五)種々の土に遊んで菩提心を發すについて、『華嚴經』

卷第八には、

淨妙の身・口と及び意行とは、十方に遊歩して障礙なく、

三世は悉とく空寂なりと了らんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。⁽⁶²⁾

と、身・口・意の三行を十方に遊歩させるに、何の障礙もなく、三世は空寂であると了解して菩提心を發すという。

(六)種々の衆をみて菩提心を發すについて、『華嚴經』に、諸の衆生の根の利鈍に随つて、種々に勤めて精進力を修し、悉とく了達して分別して知らんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

一切衆生の種々の欲、心好んで諸の慾望に樂著するを、

『摩訶止觀』發大心とその形成（大野）

悉とく了達し分別して知らんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。

一切衆生の種々の性は、無量無邊にして數うべからず。

悉とく了達し分別して知らんと欲し、菩薩は此によりて初め發心す。⁽⁶³⁾

衆生を哀愍するが故に、我れ菩提心を發す。⁽⁶⁴⁾

と、機の利根・鈍根の衆生、種々の欲をもつ衆生、衆生の性は無量無邊であることを了達して菩提心を發すという。

『發菩提心論』卷上には、衆生を慈愍して菩提心を發すに五事ありとして、

一には諸の衆生を見るに、無明の縛する所となる。二には諸の衆生を見るに、衆苦の纏う所となる。三には諸の衆生を見るに、不善業を集む。四には諸の衆生を見るに、極重惡を造る。五には諸の衆生を見るに正法を修せず。⁽⁶⁵⁾

と、諸の衆生は、無明に縛られ、衆苦にまとわれ、不善業や極重惡を造つて、正法に従つて生きていないので、菩提心を發すという。さらにそれを四種に分別して、具体的に述べている。

(七)種々の行を修するをみて菩提心を發すについて、『華

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

『華嚴經』卷第八には、

諸禪三昧および解脱と、隨順の正受とに所著なく、善く垢淨の起ることを分別せんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

一切諸道の所至の處、八正の聖路は無為に向う。悉とく了達してその実を知らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。⁽⁶⁶⁾

と、行を修するのは、迷と悟を分別することであり、正路へ向うために菩提心を発すといふ。

(八)種々の法の滅するをみて菩提心を発すについて、『華嚴經』卷第八には、

不可思議なる諸の仏刹を、皆な碎きて末となして微塵の如くし、悉とく分別してその数を知らんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

過去・未来の無量劫の、一切世界の成敗の相、悉とく究竟してその際に達せんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。⁽⁶⁷⁾

と、一切の滅相を了達するために菩提心を発すといふ。

(九)種々の過をみて菩提心を発すについて、『華嚴經』卷

第八には、

過去・未来・現在世の、一切善惡の諸の業報を、善く悉とく平等なりと觀察せんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。

世間の一切諸の煩惱と、所有の結縛と、余の習氣とを、悉とく覺知し究竟して尽さんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。⁽⁶⁸⁾

と、過去・未来・現在世の善惡の諸の業報や世間一切の煩惱・結縛、習氣などを覺知するために菩提心を発すといふ。『發菩提心論』卷上には、菩薩が自から身の過患を觀じて菩提心を発すとして、五事をあげている。すなわち、

一には即ち我が身は、五陰四大俱に能く無量の悪業を興造すと觀ず。捨離せんと欲するが故に。二には自から我が身は、九孔常に臭穢を流して不淨なりと觀ず。厭離を生ずるが故に。三には自から我が身は貪・瞋・癡、無量の煩惱あり。善心を燒然すと觀ず。除滅せんと欲するが故に。四には自から我が身は泡の如く、沫の如く、念々生滅すと觀ず。これ捨つべきの法は棄捐せんと欲するが故に。五には自から我が身は無明の覆う処にして、常に

悪業を造ると観ず。六趣に輪廻して利益なきが故に。⁽⁶⁹⁾

と、種々の己身の過患を観するに、それらの不淨を遠離するためには菩提心を発すという。

(十)種々の苦を受けるのをみて菩提心を発すについて、

『華嚴經』には、

無等々の大神変をみ、妙法及び教誡を説くを聞き、五道の無量なる苦を觀察して、無畏の大士は初め発心す。

一切世界の衆生の類は、五道の生死海に流転す。天眼を得て悉とく明達せんと欲し、菩薩は此によりて初め発心す。⁽⁷⁰⁾

太子は衆苦を見て菩提心を発起す。⁽⁷¹⁾

と、五道の生死苦海を流転する衆生を明達するために菩提心を発すという。『發菩提心論』卷上には、衆苦纏う所に四事ありとして、

一には諸の衆生を見るに、生・老・病・死を畏れて解脱を求めて、復た業を造る。二には諸の衆生を見るに、憂悲惱苦して、しかも常に造作して休息あることなし。三には諸の衆生を見るに、愛と別離するを苦しみ、方便染著を覺悟せず。四には諸の衆生を見るに、怨憎に会う

を苦しんで、常に嫌嫉を起こして、更に復た怨を造る。⁽⁷²⁾と、一切衆生は諸苦の原因を造る生き方をし、またそれらの苦にまとわりつかれているので、菩提心を発して救済するという。『大智度論』卷第七十八にも、

発心とは敬うべし貴ぶべし。所以は何かん。先に因縁を説くが如し。能く自からの樂を捨て、他に樂を与う。自から憂苦せず。他人の苦を憂うるが故に。⁽⁷³⁾

と、発心とは自からの樂を捨てて、他人の苦を憂うことであるという。

以上のごとく、『摩訶止觀』所説の十種発菩提心は、とくに『華嚴經』および『發菩提心論』『大智度論』などによつて説示されたことが明らかとなつた。ただ『華嚴經』は、偈文として示されているだけで、それらの具体的説明は一切していない。智顕は単に『華嚴經』や『發菩提心論』『大智度論』などからそのまま引用するのではなく、前述した天台独自の四種四諦、すなわち生滅（藏教）・無生（通教）・無量（別教）・無作（圓教）の四諦に配して、この菩提心の発る形態を浅から深に分別して説示するのである。

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

ていくことにしたい。

理を推す発心 まず第一は種々の理を推して菩提心を発する形態である。ここにいう理とは、生滅・無生・無量・無作の四諦のことである。理の捉え方によつて、菩提心にも相違が生ずることになる。

(1) 生滅の四諦によつて菩提心を発す場合は、理は法性であり、苦・集・道・滅そのものであつて、一切の迷妄を絶したものである。それはちょうど雲が月をつつみかくしても、月そのものを妨害できないように、害することはできない。迷いを滅し尽くそつと努力する必要のないのが法性である。煩惱の中に菩提はなく、菩提の中に煩惱はないと言知して、上求菩提・下化衆生のために菩提心を発す。

(2) 無生の四諦によつて菩提心を発す場合である。法性を究明していくば、苦や集に迷うことによつて法性を失なつてゐる。苦・集と法性は水と氷の関係であり、苦も集にも実体がないと覚知すれば、法性に出逢うことになる。煩惱即菩提・菩提即煩惱であると覚知し了達して、上求菩提・下化衆生のために菩提心を発す。

(3) 無量の四諦によつて菩提心を発す場合である。法性は

現実の諸事そのものであり、諸の事象に自在に対応して、上求菩提・下化衆生のために菩提心を発す。

(4) 無作の四諦によつて菩提心を発す場合である。一切法がそれぞれにおいて自然に表詮している眞実の在りようを、正しく捉えれば、現象界の諸事象と現実の諸の事象とに何らの区別もない。その在りようを、一色一香皆な是れ中道なりと捉えて、上求菩提・下化衆生のために菩提心を発すといふ。⁽⁷⁴⁾

理を推究して菩提心を発すには、以上の四種の形態がある。生滅・無生・無量へと次第して、智顕の高揚する菩提心は、無作の四諦を推して菩提心を発することにある。

仏の相好をみて発心 第二是仏の相好をみて菩提心を発すという形態である。劣応身仏・勝応身仏・報身仏・法身仏の四種の立場から説かれる。

(1) 劣応身仏の相好をみて、上求菩提・下化衆生の菩提心を発す場合である。仏は一切を超えた絶対的なものとみる。仏の姿は、世界を創造した毘首羯磨でも作ることができず、また転輪王も見劣りするほどすばらしい。聖法王（世自在王）と等しい身となつて、衆生を濟度してほしいと願う。

(2) 勝應身仏の相好をみて、上求菩提・下化衆生の菩提心を発す場合である。仏も相好も共に本来虚空のごとくであり、空の中には、仏や相好の何れも存在しない。このように、仏も相好も空であると覺知して、聖法王と等しい身となつて、衆生を済度してほしいと願う。

(3) 報身仏の相好をみて上求菩提・下化衆生の菩提心を発す場合である。汚れのない鏡が、諸の色像を写し出すように、仏の身相の一切は顕わし尽くしている。聖法王と等しい身となつて菩提心を発す。

(4) 法身仏の相好をみて上求菩提・下化衆生の菩提心を発す場合である。仏の智慧は十方世界のすべてを照らしており、微妙の淨法身として三十二相を具えている。その相好の一々は、実相そのものであると覺知する。これによつて、聖法王と等しい身となることを願い菩提心を発すといふ。⁽⁷⁵⁾

以上の四種の中で、法身仏の相好をみて菩提心を発すことを最上とする。

仏の神変をみて発心 第三は仏の種々の神変をみて菩提心を発すという形態である。やはり四種の見地から説かれている。

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

(1) 仏が衆生を化導する場合、四禪によつて、一つひとつのに当り、多くを一度にしない。仏の放つ光明は、阿鼻獄から有頂点に至るまでくまなく照らす。日を重ねるごとに、次第にその輝きを失わせる。聖法王と等しい身となることを願つて、上求菩提・下化衆生の菩提心を発す。

(2) 仏は無生の理に応ずるのであって、二相の立場に応ずることはない。仏は衆生の一人一人に、仏が常に現前にあることを知らせて衆生を化導する。聖法王と等しい身となつて菩提心を発す。

(3) 仏は衆生を導びくのに、如来藏によつて三昧を正しく受けたと思わせる。衆生に四威儀を発させたとしても、現象界の諸の事象が変わるわけではないと思わせる。聖法王と等しい身となつて、上求菩提・下化衆生の菩提心を発す。

(4) 仏を見るに、諸の神変は仏と同体であり、衆生を教化するのに思いのままであつて、終ることがない。一切が実相そのものであつて、一切が仏事をなしている。聖法王と等しい身となつて菩提心を発すといふ。⁽⁷⁶⁾

聞法によつて発心 第四は種々の法を聞いて菩提心を発すという形態である。四種の立場、すなわち生滅・無生・無

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

量・無作の四諦によつて説かれている。さらにそれらの一切を四種に分類して説示している。

(1) 生滅の法を聞いて菩提心を発す場合、四種の形がある。

(a) 生滅の法を聞いて、世間・出世間の一切法は常に生滅をくりかえす。戒や智慧や解脱は動ずることがないと覺知して菩提心を発す。

(b) 生滅の法を聞いて、四諦は不生不滅であり、空の中には抜くべき刺は存在しない。それゆえ苦・集・修・証もないと覺知して菩提心を発す。

(c) 生滅の法を聞いて、生滅を不生滅に対し二とすれば、生滅でも不生滅でもない。二邊を超えた当處を中という。中諦こそが唯一の真理そのものであると覺知して菩提心を発す。

(d) 生滅の法を聞いて、諸法を生滅するだけのものと了解するのではなく、同時に不生滅・非生滅・非不生滅と捉える。諸法は一方のみに偏つて捉えられるのでなく、一諦はそのまま三諦であり、三諦はそのまま一諦である。法界・秘密藏・常樂を具足していると覺知して菩提心を発す。

(2) 無生の法を聞いて菩提心を発す場合も四種の形がある。

(a) 無生の法を聞きながら、生滅の立場に立つて、一切法を了解して菩提心を発す。

(b) 無生の法を聞いて、声聞・縁

覚・菩薩は見・思の二惑を対治して、一切法を空と了解して菩提心を発す。

(c) 無生の法を聞いて、無明を対治できるのは菩薩であつて、二乘ではどうてい及ばないと了解して菩提心を発す。

(d) 無生の法を聞いて、一つの無生は、一切の無生に通ずと了解して菩提心を発す。

(3) 無量の法を聞いて菩提心を発す場合も四種の形がある。

(a) 無量の法を聞いて、煩惱を対治するために、四諦・十六諦（行觀）などを修することによつて菩提心を発す。

(b) 二乘は自己の悟りだけを目的として、見・思の二惑が調伏できても、他者を教化することはできない。菩薩は自から惑を去つて、他者をも化導できると了解して菩提心を発す。

(c) 無量の法を聞いて、塵沙の対治は二乘の及ぶところではなく、菩薩においてはじめて行なうるものである。菩薩は三界の内にあって、衆生を悩ます塵沙をも調伏する。さらに三界の外にあって衆生を悩ます塵沙をも調伏する。

は根本煩惱である無明までをも断伏すと了解して菩提心を発す。

(d) 無量の法を聞いて、菩薩は無明の断伏をするとともに、菩提の完成を目的としていると了解して菩提心を発す。

(4) 無作の法を聞いて菩提心を発す場合も四種の相異がある。(a) 無作の法を聞いて、これは仏・天・人・修羅の所作ではなく、二乗人の証得であると了解して菩提心を発す。

(b) 無作の法を聞いて、真実の法は三乗人において証得されると了解して菩提心を発す。(c) 無作の法を聞いて、二乗や凡夫の境界ではなく、菩薩によってのみ権の無作（現実の諸事象）を破して、実の無作（現象界の諸事象）を証得するとして了解して菩提心を発す。(d) 無作の法を聞いて、現実の諸事象に即して、現象界の諸事象が捉えられると了解して菩提心を発すという。⁽⁷⁷⁾

以上、生滅・無生・無量・無作の四種四諦に、それぞれ四種の菩提心の発相を当てて説いたのである。智顕の意図する発菩提心の形は、無作の法を聞いて菩提心を発すことにあるといわねばならない。

四種四諦と三諦偈 さらに、『摩訶止観』卷第一下には、一法を聞いて菩提心を発すことは容易でないとして、具体的に説示するため、『中論』卷第四の觀四諦品の三諦偈に当てて、四種の立場から説くのである。

(1) 生滅四諦の義として、藏教の立場から、

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

もし、「因縁所生法 我說即是空」というは、すでに因縁所生という。何ぞ即空なることを得ん。すべからく因縁を析し尽くして、まさにすなわち空に会し、まさに空なるを呼んで即空となすなり。⁽⁷⁸⁾

とあり、「因縁所生法 我說即是空」という句は、現象界が空であり、物自体が空であるといい、単に空論を説くのみであって、即空の義でなく、析空觀の立場であるという。

「亦名為仮名」とは、有為虛寂にして勢い独り立せず。衆縁を仮りて成ず。縁に頼るが故に仮なり。施權の仮にあらず。⁽⁷⁹⁾

と述べ、諸法の一切が自立して存在しているものではなく、すべて諸の因縁を仮りて成り立っているのである。さらに、「亦名中道義」とは、断・常を離れるを中道と名づく。仏性の中道に非ず。若し是の如きの解をなさば、三句みな空なりといえども、なお即空を成ぜず。况んや即空・即仮・即中をや。

と説く。断・常の二辺を遠離することを中道と呼んでいるにすぎない。これらは生滅の四諦（藏教）によつた解釈であつて、空とはいものの、即空・即仮・即中の義ではな

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

いという。

(2)三諦偈を空の面から捉え、通教の立場として、若し因縁所生の法は、破滅を須^{もぢ}いらずして体即ちこれ空なり。しかも即仮・即中なることを得ず。たとい仮・中となすも皆な入空に順ず。何となれば、諸法は皆な即空なり。主我なきが故に。仮もまた即空なり。施設を仮るが故に。中もまた即空なり。断・常の二辺を離るるが故に。

この三番は、語は異なりといえども入空に順ず。退いては二乗の析法にあらず。進んで別にあらず。円にあらず。乃ちこれ三獸渡河の苦空の意なるのみ。

と述べる。因縁所生の法は、そのままの姿が空そのものの在り方をしている。仮や中であるということはできない。なぜならば、諸法は即空の在り方をして、主我となるものがないからである。仮もまた施設を仮りるので、即空の在り方をし、中もまた断・常の二辺を離れて、即空の在り方をしている。三者の何れもが、空であると捉える立場であり、共空（通教）の説示である。

(3)三諦偈は空・仮・中の三諦を説くも、三者が相互に関係をもたない別教（隔歴三諦）の立場として、

若し即空・即仮・即中なりといわば、三種は遷^{ハシ}としておのおの異りあり。三語みな空なりとは、主なきが故に空、虚設の故に空、無辺の故に空なり。三種みな仮なりとは、同じく名字あるが故に仮なり。三語みな中なりとは、中真・中機・中実の故に中なり。これは別を得て円を失す。云⁽⁸²⁾々。

と説く。空は空であり仮・中である。仮は仮であり空・中である。中は中であり空・仮もある。ただ三者が空・仮・中という場合、それぞれの意味が異っている。すなわち、空が空であるというのは、実体がないからである。仮が空であるのは、一切が仮りの存在だからである。中が空であるのは、二辺を離れて限定されたものでないからである。三者が仮であるのは、名字があるからである。また三者が中といわれる場合、空が中であるのは、断・常の二見を離れたことである。仮が中であるのは、衆生の機根に差異のないことである。中が中であるのは、眞実そのものを意味する。これは別教の立場である。

(4)即空・即仮・即中の円教（円融）の立場として、

若し即空・即仮・即中なりといわば、三なりといえども

一、一なりといえども三にして、相い妨礙せず。三種みな空なりとは、言思の道断えたるが故なり。三種みな仮なりとは、ただ名字あるが故なり。三種みな中なりとは、即ちこれ実相なるが故なり。ただ空をもつて名となすも、すなわち仮・中を具し、空を悟ればすなわち仮・中を悟る。余もまた是の如し。⁽⁸³⁾

とある。空・仮・中は、即空・即仮・即中であり、三は一であり、一は三であつて、相互に妨礙をしない。三種が空というのは、言語を絶したことである。三種が仮というのには、仮りに名字があるからである。三種が中というのは、実相そのものであるからである。一切が空であることは、仮・中も具し、一切が仮であることは、空・中も具し、一切が中であることは、空・仮も具している。空を悟れば仮・中を悟り、仮を悟れば空・中を悟れば空・仮を悟る。このように一切法は、三者が不即不離の関係にあって、即空・即仮・即中の在り方をしているというのが、円教の立場からの説示である。

以上が、第四の種々の法を聞き菩提心を発す形態である。智顕はとくに法を聞く場合について、種々に分別して説示

する。やはり法を聞くことを契機として、菩提心を発すケースが一番多いのである。その聞き方にも浅深があり、心しなければならないのである。

『摩訶止觀』には、名目として、第五に種々の淨土に遊んで菩提心を発す。第六に種々の徒衆をみて菩提心を発す。第七に種々の修行するのをみて菩提心を発す。第八に種々の法の滅するのをみて菩提心を発す。第九に種々の起過をみて菩提心を発す。第十に種々の苦を受けるのをみて菩提心を発す形態などをあげている。ただし、第五より第十までについて、

その淨土・徒衆・修行・法滅・受苦・起過等の發菩提心は、前に例して解すべし。また委しくは記さず。⁽⁸⁴⁾

と述べ、不説となつていて、その發相がいかに複雑で多岐にわたつてゐるかを説示する。それは同時に、人間の心の複雑さに起因してゐる。『華嚴經』の十種發菩提心を根拠としながらも、『摩訶止觀』においては、天台独自の生滅・無生・無量・無作の四種四諦に配し、發相の浅から深に至る發菩提心の形態を明らかにしたのである。智顕の意図する究窮の菩提心は、無作の四諦に

『摩訶止観』発大心とその形成（大野）

基づくものであることを高揚するのである。

三種止観と発心 さらに『摩訶止観』卷第一下には、法の捉え方と発菩提心との関係を三種止観と関連づけて詳細に論じている。いまそれを要約することにしたい。法性の推究を通じて菩提心が成立する場合、漸次止観・円頓止観・不定止観の三種の形態がある。まず第一は漸次止観の形態として、軽きより重きへという経過を経て、法性の了解がすすんで、それに応じて菩提心が確立してくる。第二は円頓止観の形態として、苦・集・道・滅の四諦そのままが真実そのものであると了解する態度が、菩提心そのものの内容となることである。第三は不定止観の形態として、法性の把握の浅深と、成立する菩提心の浅深とが、規則的に対応することがない。たとえば、法性の浅い把握が、深い菩提心の確立を導びくように、定まらない形で菩提心を確立するという。⁽⁸⁵⁾これら三種の発菩提心の形は、いずれも大乗の教えにかなうものであることを明示するのである。さて、以上で本稿の論究を終ることにしたい。本来ならば、次項において、結語なりを述べるべきである。しかし本論は、論究の途中で中断することになるので、続篇の別

稿において、結語を述べることをお断りしたい。

- (1) 『六妙法門』(『大正藏』四六・五五四b)
(2) 『天台小止観』(『大正藏』四六・四七三a、岩波文庫一八二一一八四頁)
(3) 『覚意三昧』(『大正藏』四六・六二一b)
(4) 『方等三昧行法』(『大正藏』四六・九四六c)
(5) 『次第禪門』卷第一上(『大正藏』四六・四七六b)
(6) 『法界次第初門』卷下之上(『大正藏』四六・六八五b—c)
(7) 『摩訶止観』卷第一上(『大正藏』四六・四a)。菩提心を全仏教の立場から研究されたものに、田上太秀著『菩提心の研究』(東京書籍)がある。訳語について、「第四章ボーディッタ(bodhicitta)の漢訳語とその用例」(一一一—一四一頁)に詳しい研究がなされている。
- (8) 同右(同右・四a—b)
(9) 『次第禪門』卷第一上(『大正藏』四六・四七六a—b)
(10) 『大智度論』卷第八十六(『大正藏』二五・六六三a)
(11) 『大般涅槃經』卷第二十六(『大正藏』一二・七七八b)
(12) 同右(同右・七七八c)
(13) 『摩訶止観』卷第一上(『大正藏』四六・四c)
(14) 同右
a) 『法華玄義』卷第六上(『大正藏』三三一・七四六c—七四七
- (16) 『大智度論』卷第一(『大正藏』二五・五九b)

- (17) 四悉檀について詳しくは、『法華玄義』卷第一下(『大正藏』三三・六八六c—六八七c)に説示している。
- (18) 『法華玄義』卷第六上(『大正藏』三三・七四七a—七四八b)。また『觀音玄義』卷下にも感應について説く(『大正藏』三四・八九〇c—八九一b)。福島光哉稿「天台における感應の論理」(『印度学仏教学研究』第一八卷第一号所収)参照。
- (19) 四隨は正しくは、隨樂欲・隨便宜・隨對治・隨第一義をいう。詳しくは、『法華玄義』卷第一下(『大正藏』三三・六八七c—六八八a)、および『維摩經玄疏』卷第一(『大正藏』三八・五一—a—b)などに説いている。
- (20) 『摩訶止觀』卷第一上(『大正藏』四六・五a)
- (21) 同右(同右・五b)
- (22) 『大本四教義』卷第七(『大正藏』四六・七四四a)。同様の文が、『維摩經玄疏』卷第三(『大正藏』三八・五三六a)にある。
- (23) 『四念處』卷第一(『大正藏』四六・五五八b)。また『大本四教義』卷第四(『大正藏』四六・七三四a)にも同趣旨の文がある。
- (24) 『大本四教義』卷第四(『大正藏』四六・七三一a)
- (25) 『法華玄義』卷第二下(『大正藏』三三・七〇一a)。また『大本四教義』卷第二(『大正藏』四六・七二五c—七二六a)にも詳説している。
- (26) 『摩訶止觀』卷第一上(『大正藏』四六・五b)
- (27) 『大本四教義』卷第八(『大正藏』四六・七五〇a—b)
- (28) 『維摩經玄疏』卷第二(『大正藏』三八・五二九c)
- (29) 『法華玄義』卷第二下(『大正藏』三三・七一〇a)。また『大本四教義』卷第一(『大正藏』四六・七二六a)にもある。
- (30) 『摩訶止觀』卷第一上(『大正藏』四六・五b)
- (31) 『四念處』卷第三(『大正藏』四六・五七一a)
- (32) 『大本四教義』卷第九(『大正藏』四六・七五三b)
- (33) 『法華玄義』卷第二下(『大正藏』三三・七〇一a—b)。同趣旨の文が、『大本四教義』卷第一(『大正藏』四六・七二六a—b)にもある。
- (34) 『摩訶止觀』卷第一上(『大正藏』四六・五b—c)
- (35) 『四念處』卷第三(『大正藏』四六・五六八a)
- (36) 同右・卷第四(同右・五七六a)
- (37) 『大本四教義』卷第十一(『大正藏』四六・七六一b)
- (38) 『法華玄義』卷第二下(『大正藏』三三・七〇一b)。同様の説示が、『大本四教義』卷第一(『大正藏』四六・七二六b)にもある。無作の四諦について、武覺超稿「天台大師智顗の菩提心について」(『叡山学院研究紀要』第四号所収)がある。
- (39) 『摩訶止觀』卷第一上(『大正藏』四六・五c)
- (40) 四土について詳しくは、『維摩經文疏』卷第一(『正統藏』通卷二七・四三三二右—四三七右)に説かれる。
- (41) 四諦と十二因縁の関係について詳細に論じているのは、『法華玄義』卷第三上(『大正藏』三三・七〇六a—七〇七a)

『摩訶止觀』発大心とその形成(大野)

『摩訶止觀』発大心とその形成（大野）

である。

- (42) 『法華玄義』卷第三上 (『大正藏』三三・七一〇c—七一一
c) に詳しく述べてある。

- (43) 『中論』卷第四・中論觀四諦品第二十四には、「衆因縁生法
我說即是無 亦為是假名 亦是中道義」(『大正藏』三〇・三三
b) とある。

- (44) 『摩訶止觀』卷第一上 (『大正藏』四六・五c—六a)

- (45) 同右 (同右・六a)

- (46) 『止觀輔行伝弘決』には、「華嚴第六」と記し、『講義』で
は、「旧經九二」としている。現行本では、卷第八の菩薩十住品

- 第十一 (『大正藏』九・四四六c—四四七b) に当る。

- (47) 『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c—四四七a)

- (48) 『大智度論』卷第七十一 (『大正藏』一二五・五五九a)

- (49) 『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c)

- (50) 『華嚴經』卷第八 (『大正藏』一二五・五五九c)

- (51) 『大智度論』卷第二十六 (『大正藏』一二五・二五一a)

- (52) 『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c—四四七b)

- (53) 『大智度論』卷第三十二 (『大正藏』一二五・三〇〇b)

- (54) 同右・卷第四十六 (同右・三九一b)

- (55) 同右・卷第九十九 (同右・七四四b)

- (56) 『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c—四四七b)

- (57) 『護國經』 (『大正藏』一・八七一b)

- (58) 『大般涅槃經』卷第二十四 (『大正藏』一二・七六二a)

『大智度論』卷第三十二 (『大正藏』二五・三〇一c)

同右・卷第三十八 (同右・三四二b—c)

同右・卷第九十九 (同右・七四四b)

『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c—四四七b)

同右 (同右・四四六c)

同右・卷第五十六 (同右・七五八b)

『發菩提心論』卷上 (『大正藏』三一・五〇九c—五一〇a)

『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c—四四七a)

同右 (同右・四四六c—四四七a)

『發菩提心論』卷上 (『大正藏』三一・五〇九c)

『華嚴經』卷第八 (『大正藏』九・四四六c—四四七a)

同右・卷第五十六 (同右・七五八b)

『發菩提心論』卷上 (『大正藏』三一・五一〇a)

『大智度論』卷第七十八 (『大正藏』二五・六一〇b)

『摩訶止觀』卷第一上 (『大正藏』四六・六a—b)

同右・卷第一下 (同右・六b—c)

同右 (同右・六c)

同右 (同右・七a)

同右 (同右・七a)

同右 (同右・七a—b)

同右 (同右・七b)

(82) 『摩訶止観』卷第一下(『大正藏』四六・七b)

(83) 同右

(84) 同右
(同右・七b—八a)

(85)

付記 本論文を執筆するに当り、新田雅章訳『摩訶止観』(仏典講座二五、大蔵出版社)、村中祐生訳『摩訶止観』(大乗仏典〈中国・日本篇〉第六巻、中央公論社)の一書を参考にさせていただいた。とくに新田雅章博士の訳は、『摩訶止観』の全体系をふまえて現代語訳がなされていて、多くの示唆を得た。